MGプレス　2019.06.28

わずかに漂う香りに集中する松本深志高香道部の生徒

「香道」を次世代へ

若者が向き合う日本芸道の魅力

左手に載せた香炉を右手で囲い、ほのかに立ち上がる香りに神経を集中させる―。香木をたいて香りを鑑賞する「香道」は、茶道、華道と並ぶ日本三大芸道だ。

香は「かぐ」とは言わず、「聞く」と表現する。香道では、嗅覚ではなく、「心の耳」で聞くような精神性を大切にするからだ。

作法は室町時代の東山文化で確立した。歴史がありながら現在、全国で携わっているのは師範を含め1200人ほどという。そうした中、松本市では松本深志高校に全国でも珍しい香道部があり、中学校の授業で体験講座も開かれている。

香りと向き合う大人の世界というイメージが強い香道に、若い世代がどう向き合っているか。市内の稽古場や体験講座を訪ね、話を聞いた。（井出順子）

03面に続く

松本 絶品
開運老松
登録商標
開運堂

華やかで静かな時間を楽しむ

クローズアップ

（01面から続く）

香道の魅力 次世代へ

感覚集中し稽古 深志高校香道部

松本深志高の香道部は、17人の部員が月に2回、志野流師範、矢上千佳子さん（75、里山辺）の自宅で稽古にいそしむ。

9日、複数の香を聞き当てる「組香（くみこう）」の一つ「源氏香」に挑んだ。5つの香りを順番に聞き、香りを区別。そして、その異同を表した52種類の図のどれに当たるかを競う。図にはそれぞれ源氏物語の帖名が付いており、例えば、2と3が同じ、1、4、5がそれぞれ違う香りという組み合わせなら「夕顔」となる。

香を聞く時は正座を崩した「安座」でも。稽古する在校生とOBの百瀬さん（右）

香をたく「香元」と記録係の「執筆」は3年生が務めた。新入生も一緒に、回ってくる香炉を手に取り、全感覚を集中して記憶にとどめる。一巡すると各自が墨を含ませた筆で答えを記入。執筆が取りまとめ、正解を発表した。

なぜ香道部を選び、どんなところが魅力なのか。生徒に聞くと、古庄美和子さん（1年）は「テレビドラマで源氏香を見て、こんなに華やかで美しい世界があると衝撃を受けた。作法ができれば外国人にも日本文化を教えられそう」。

この日、見事に正解した山本真樹さん（2年）は「森の中とかレモンとかサウナとか、イメージを浮かべて記憶した。聞ける聞けないよりも感覚に集中するのが大事だし、その瞬間が好き」という。

答えを記録する「執筆」の3年生。一文字一文字、丁寧に筆を走らせる

同部は2002年、男子生徒の呼び掛けで発足した。当時は部員16人中12人が男子。今でも香道を続けている05年度卒業の百瀬文貴さん（32、松本市）と吉田智哉さん（31、新潟市）も、この日の稽古に参加した。

百瀬さんは「日常で静かな時間を持つことが大切だと思う。自分磨きをしながら続けさせてもらっている」。吉田さんは今年、新潟市で初の教場を開く予定で「続ければ続けるだけ気付きがあるのが楽しい。とても奥が深い」と話す。

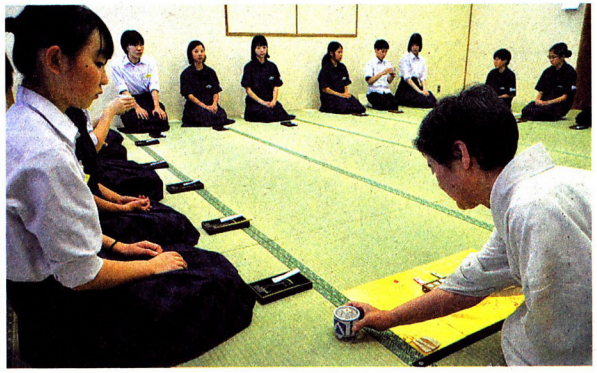
7月6、7日の文化祭「とんぼ祭」で同部は午後1時から、一般向け体験会を開く。部長の後藤桃香さん（3年）は「香りが好きな人や、静かにほっとひと息つきたい人など、ぜひ気軽に体験してほしい」と呼び掛ける。

構えずに楽しむ 山辺中体験講座

体験講座として香道を扱う中学校もある。山辺中学校（松本市里山辺）には、地域住民を講師に迎える「山辺ドリーム大学」に香道の講座があり、17人が受講している。

17日は全7回うち2回目の講座。生徒は、初心者向けの組香「松竹梅香」を体験した。講師の矢上さんが香道や作法を分かりやすく説明した後、3つの香を聞き分けた。

小松宇太君（2年）は「普段、うるさくはしゃいでいる自分とギャップのある世界を体験してみたかった。香は温かく落ち着ける。昔の人の気持ちに近づけたらいい」。敷居の高そうな香道を、構えず、素直に楽しんだ。



山辺ドリーム大学で香道を体験する山辺中の生徒たち

矢上さんは「香りという別世界に遊び、ほっとするひとときを過ごせるのが魅力」と語る。一方、香道人口が少ないことについて、目に見えない香りを大事にする世界は好みが分かれ、組香で答えを出したり着物や書道が加わったりする要素を煩わしく思う人もいるのではーと見る。

香道は香りを軸にさまざまな世界が広がる総合芸道。25年前、松本で初の教室を開き、県内各地で普及に努める矢上さんは「高校生など若い世代が目を向けるようになったのが一番うれしい。自分を磨く手だてとし、すてきな人になるために役立ててもらえれば」。そう話し、次世代の香人に期待を寄せた。

メモ

【香道】 東南アジアで産出する天然香木の香りを鑑賞する。伽羅（きゃら）、羅国（らこく）など6種類の香木に、甘い、苦いなど、香りを5つの味に置き換えた「六国五味（りっこくごみ）」が分類の基本。香席では主にゲーム形式で香りの違いを楽しむ「組香」が行われるほか、香木そのものを鑑賞する「名香」もある。